

島原の乱の使者の戦い（4）

— 土佐藩の場合 —

武田昌憲

島原の乱（一揆）の発生に際して、土佐藩山内家ではどのような対応をしたのであろうか。今、『山内家史料』（注1）に見える記事から展開を追ってみてい。

寛永十四年十一月十九日に、江戸にいた藩主山内忠義からすぐに土佐に島原一揆発生の連絡が行く。続く十二月三日には、中老の仙石但馬父子と馬周りの毛利久八を肥前に派遣し、一揆征伐のために集まった諸将をねぎらうために派遣するように文書が成される。662p（『山内家史料 第二代 忠義公紀

第二編』所載のページ、以下同じ）。これは、幕府の上使として新たに、松平信綱と戸田氏鉄が派遣されるための対応策であった。特に毛利久八は「彼表案内存候は又但馬一所ニ遣事ニ候」663pとあるように九州の地理・事情に詳しい人物であった。飛脚も

五人付けるように書かれている。また船を大坂に廻航させ幕府の用に応じるように手配をもさせている。九州の絵図・嶋原の絵図も送って、書き写すようにと指示もしている。656p

ちょうど土佐本国では、前年の寛永十三年（一六三六）に単独で国元土佐の奉行職に就いたばかりの二十二歳の野中兼山がいて、土佐は改革ののろしが上がったばかりの時期でもあった。若い兼山の指揮の下で、江戸の指令から当初、馬廻り役の板坂馬左衛門利正を使者として現地に派遣する予定であったが、あいにく馬左衛門が病気であったので（のちに死去）、急遽、雨森九太夫氏康を使者として十二月十日に土佐国から続けて現地向わせた。677・678p まだ十二月三日の江戸からの指令（冒頭部）

が届く前の兼山の迅速な処置と思われる。

『山内家史料』収の「御家中名譽」の雨森九太夫の

項にはこの時「鉄炮足軽三十人小頭式人池田嘉兵衛

鈴木彦大夫（一書ニハ藤崎彦大夫トアリ）自身預

リ之弓足軽召連同十二月十日高知出船同廿九日肥前

有馬工参着」679pとあるように、ただの使者ではなく、

小頭二名と鉄砲隊三十人以下弓足軽隊も連れて行っ

たことがわかる。この対応は鉄砲隊を連れて行つた

毛利藩の使者の場合と同じである（注2）。ちなみに

雨森一行は肥前有馬まで十九日かかっている。仙石

但馬父子と馬周りの毛利久八の方は、信綱一行と共に

したのであるか。「御家中名譽」の仙石但馬久勝

の項では寛永十五年正月二日に嶋原に参着している。

667p

雨森九太夫の事

雨森九太夫は父と共に、もとは石田三成の家臣とし

て、小田原の陣以来、朝鮮の役に至るまで数々の秀

吉の合戦に参加し活躍していることが山内史料の「御

家中名譽」からもわかる。はじめは九右衛門と言っ

ていたが、山内家に仕えてからは九太夫と改名して
いる。702p

特に関ヶ原の合戦の前哨戦の九月十四日の大垣表

の合戦では首を二つ討ち取っていて、その落ち着い

た振る舞いから、島左近から賞美がされている。701p。

十五日の関ヶ原合戦では当然西軍（石田三成方）に

加わって奮戦するものの、苦戦する。「御家中名譽」

を引用する。「一 同十五日関ヶ原合戦ニハ左備二罷

在候所ニ井伊兵部少輔殿田中兵部少輔殿両旗ニテ此

備へ馬を被入乱合候合戦ニ相成九右衛門先きをかせ

き申中手疵を蒙馬に乗おくれ候所ニ少之間ニて味方

忝人も居不申すへき様なく井伊殿之御備ニ紛れ入候

得は落人之穿鑿強ク何者ぞと相尋候ニ付一豊様御内

ニ知る人御座候故御家號を偽り唱御威光を以不思議

之命を助かり申候此時分治部少輔家中ニては自分知

行四百五拾石足軽鉄砲五拾挺預弓鉄砲頭三拾六人御

座候内九人之高ニて罷在候由

一 同年関ヶ原落去以後一豊様より可被召抱御旨

被仰下上方ニて御目見仕康豊様え御口上被仰進十二

月二日大坂を罷立同六年正月六日御先え甲浦着船折

節康豊様野根ニ被成御座候ニ付頓て御目見仕御口上之通申上候處ニ知行四百石御弓知式百石都合六百石被下置候由（九右衛門儀此以前九太夫と改名仕候）
701.702p

関ヶ原戦での西軍敗北決定後の敗走では、東軍の敗走軍への探索が厳しくて雨森も逃走途中に徳川方の井伊家の検閲を受けてばれそうになったところをとっさに山内家の知り合いがいることから、山内家の家臣と偽って難を切り抜けている。山内家の御威光を借りて「不思議之命を助かり」、そのことが縁となり、戦後、掛川城主から土佐一国を拝領するといふ大幅な加増を受けた山内家に仕えることとなる。もちろんこれまでの石田三成に忠勤をはげみ、また多くの武功を立てた功績によるところが大きいものであっただろう。しかも石田時代の四百五十石から山内家での六百石への加増での再就職であった。敗北側にいたものとしては幸運な境遇であった。これは敵方であっても忠義・功績によっては勝者の側で高禄を得ることができると好例の一つである。

雨宮はその後も大阪の陣に参加し、城中に矢を射

こんだりの活躍をする。また元和五年（一六一九）の安芸国広島福島氏の改易にも参加して、山内家の重責を果たしている。普通ならばこれで彼の人生は平穩に終わるはずであった……。寛永十四・五年の嶋原一揆（乱）ではすでに九太夫は齡七十五になっていたが、島原の使者役も当初は他のものが派遣されることになっていたのに、病気のために急遽、代理として九太夫に指名されたことは前述した。島原への使者の役に立てられたのは、これまでの実績や人柄が高く評価されたことは間違いない。しかし、単なる使者ではなく、しっかりと鉄砲隊や弓隊等の足軽部隊を率いて出発していることが、穩便に収まることではない事態であることを示している。

九太夫の討死

島原原城攻めでの九太夫の活躍と戦死の様子を同じく「御家中名譽」から引用する。

「一 明ル十五年正月元日島原總責之節九太夫儀松倉長門守仕寄を借り（一書にハ内膳殿御仕ヨリ備トモアリ）城を乗三之丸際まで責詰候處に城中より鉄砲

稠敷打出し九太夫も股根を被打拔并に組之鉄炮小頭池田嘉兵衛も深手を負九太夫家来忒人（若党井澤仁左衛門小者六助）即座に相果其外手負少少有之此時鈴木彦大夫板倉主水殿馬駿朱之瓢箪持居候何ノ與兵衛と申者へ九太夫深手負候段申届石谷十藏殿馬場三郎衛門殿榊原飛騨守殿えハ九太夫深手負并家来手負死人等之様子自身直に申上候得ハ早早引養生仕候得と被仰付候由

一 同三日養生仕罷在候中右之御衆より御懇之御意を以為御使者惣田七郎右衛門（一書にハ寒田と有）黒澤十右衛門と申兩人御差越手負討死之者共不殘帳面に御記被成榊原飛騨守殿御醫師道與と申す仁に被仰付九太夫え御藥被下候よし

一 九太夫儀深手故戰場不罷成御国え罷下候へと被仰付同七日有馬を罷立道ニも醫師に懸り罷帰候内倅九之助九太夫と一所に被遣被下様にと主水迄再三申達候得共御留守之儀無用之由指留申候然共老人之事無心元忍候テ正月元日御国を罷出同十四日肥後熊本にて九太夫に行逢召連罷歸候處此様子先達て御国えも相聞へ野中主水方より金瘡醫休齊と申者に家来

差添迎ニ越是又道中にて行逢養生仕罷越候得共極老と申深手故次第に差重り御国柏嶋にて二月三日七拾五歳にて終に相果候よし」703p

九太夫は二十九日に島原に着くとすぐに、元日の戦いで鉄砲瘡を受け、重傷を負う。色々と介抱を受けるが、その傷が治らないまま土佐本国の柏島まで戻ったところで亡くなったのである。

是とは別に、雨森が元旦の攻撃の時に、松倉藩の陣営に加わっていたのではなく、上使の板倉重昌の陣についていた記事が見える。『山内家史料』所収の「南路志」（文化十年）を引用する。「又雨森九太夫は先年石田治部少輔に仕て物頭成りし武功のものなれば板倉内膳正軍の差引万事相談被致たる正月朔日の合戦板倉勢敗軍し嫡子主水正返し進まれけるに内膳正此上はとて即時に掛出んとし玉ふ所を九太夫ハ内膳正鎧を掴へて爰は大將の出で玉ふ所に非らず合戦は懸引こそ専用ニ候先爰を引退玉ひ重て軍令を定て御勝利有度候と被諫ければ内膳正いかにも尤二候へ共眼前愚息主水死に臨みたるに見捨て引と云事やあ

らんと鎧の袖を引放し駈ケ出玉へバ力不及九太夫も御共申さんとして続て進ミけれバ諸国の武士我劣らじと駈け出けるが或手負或討死に内膳正も既に討死し玉ひ石谷十蔵板倉主水重手を負雨森九太夫も鉄砲に當り郎等武人討れけり軍散して後九太夫ハ沖ノ島迄無恙被歸疵痛ミ出て終に沖島にて被死ける」(50p)これによると雨森は板倉重昌の無理な突撃を押しとどめようとしていたが、重昌の強引な突撃のとばっちりを受けて鉄砲傷を受け、帰国途中で落命したことになっている。

なお、雨森九太夫については初代藩主一豊公とのエピソードとして、慶長七年十月の法事の時に、寺から出された赤飯を一豊の前で山盛りの赤飯を二盛食べたところ、一豊から「雨森ニテハ無之大盛ニテ候」と言われ、重ねてもう一杯仰せつけられたので、雨森はもう一盛食した。彼については続けて「此九太夫強勇ニテ戦場へ赴ク時ハ朝ニテモ晩ニテモ五人前ノ飯ヲ食シ二日程ハ無食ニテ相戦候者故三盛モ食シ候筈」(注3)と言われたという程の豪勇の士として一豊からも親しく知られていたことが分かる。

雨宮は正月元旦の、幕府の上使である板倉重昌の総攻撃により、総大将板倉の軽拳を諫めるとともに、板倉の討死と共に、そばにいた関係で鉄砲で股を射られて重傷を負い、回復することなく、帰国途中の二月に土佐国の島で亡くなってしまふ。使者の最後はこのように美化される傾向にある一例である。乱に参加した藩の代表クラスの使者として、戦死した例は少なくないが、雨宮の例は山内家資料の中でも特筆されているだろう。これにより土佐山内藩でも島原の乱に参加して活躍していることが知られる。

雨宮九太夫は島原の乱に参加して戦傷死した、物語としてもあまりにも劇的すぎる一生であった。

仙石但馬の活躍

雨森が重傷を受けて戦場を離脱した後は、前述した仙石但馬が正月二日に参着し、雨森は七日に帰国の途に就く。土佐藩としては使者の役目を続けて果たすことができた。但馬はさっそく信綱に城中の攻め口を所望する。雨森と同じく戦闘に参加する気であるのだが、信綱や氏鉄は拒否する。

「責口一所御渡被下上下働仕度旨伊豆殿左門殿え相願
候得共諸国之使者え責口は不被下候間左様二相心得
候得と被仰渡尤但馬儀福島以來場数名譽之者二候間
軍之差引御談合可被成二付老躰旁座上自由二仕候得
と被仰付御本陣近被差置候由同月二十七日惣責之節
は嫡子左近二男勘兵衛三男八左衛門毛利久八右執も
城中え乗入候由中二も八左衛門儀一揆二三人槍にて
突倒し其身も冑をしたたかに打たれ候得共ためし鉢
二て強ハ痛不申名譽なる仕合といづれも申あひ候と
申傳候」667・668p

この報告文では、仙石は老体であり、信綱の戦さ
の相談役といふことで立場を収めている。

このことについては『治代普頭記』にも記されて
いて「松平土佐守使者仙石但馬守昔年福島左衛門大
夫に仕へし古老の侍成が壮年より武道の達者にて其
覺数数なれば此度も數百騎雜兵を引率し伊豆守左衛
門両所へも理て御陣所一場承て一働き仕らんと申け
れば両大将も其儀をハゆるし給はず惣使者陣場の中
にて一所一構渡給ひ扱伊豆守別て懇切にて軍法に馴
たる但馬なれば萬事軍の指引談合ましまし陣中の往

来も老躰の身なればとて座上の平座をなさせ給ふ」
(667) 経験豊富な仙石の戦国氣質と、若い信綱の気の
配りようがよくわかる。

しかし仙石は子供三人も引き連れていて、この三
人は毛利久八と共に二月二十七日の最終の城攻めに
参戦して名譽なこととしている。いったいこの使者
は何人連れて島原に来ているのであろうか。飛脚も
五人手配していたし、子息も三人連れてくる。雨森
九太夫の鉄砲隊・足輕隊もそのままであろう。その
ほかの供回りの者を加えると優に百数十人を超える
人数になると思われる。

本隊の出兵

二月二日、藩主忠義は幕府から四国中国の大名の
帰国を命じられ、六日に江戸を出立し、二十三日に
高知城に帰ってくる。697p この日以前に、土佐で
は藩主忠義が帰国してすぐに出陣の準備に取り掛か
り、高知城を出て浦戸に至り、そこで九州に向けて
解纜しようとしたところ、一揆鎮圧の報が入ったの
で出陣を取りやめたことが記されている。710p 日付

に気がかりな点もあるが、そこには（「南路志」）島原での土佐勢の陣備えが書かれていて、雨森九太夫もあるが、注で「九太夫は是時既ニ死ス」と書かれている。一揆の鎮圧が遅れていたら、土佐藩の軍勢や、毛利藩の大軍も陣形図に加わるころであった。

また、万一出陣の令が下った時には、「内内山分其外鹿をうち候帳面ニ付印置候者共之内千人嶋原へ可召連候間内を以其用意申付可置候千挺迄召連候事不成候ば七八百挺にても可召連候間其通申付尤二候猶相替事候を追て可申遣候」^{T110} 国内の獵銃打ちを帳面に付けて管理していると同時に、島原に千人召し連れるようにリストを作成していることも興味深い。又戦後の幕府の上使の帰還に際して、三月六日に豊前国小倉に関船・荷船三十余艘を廻漕させている。^{T130} 結局本隊は土佐の出口である浦戸まで来たところで引き返したとあるので、実際の出陣と言えるかどうか確認できない。しかし、使者を何人も現地に差し向けて参戦させていることはわかった。

以上、土佐山内藩の島原の乱への使者の動向は、他の諸藩に比べて、使者の一人である雨宮九太夫の

動向が、戦いの傷がもとで亡くなっているだけに、注目に価する記事であることがわかった。そして物語として、配置先が松倉長門守の備えでの負傷ではなく、板倉重昌の横でのアドバイスの任務を負ったの戦死と変わっていった可能性もあるなど、話が華々しくなる一例と見て取れるかもしれない。

注

1、『山内家史料 第二代 忠義公紀 第二編』

（山内家史料刊行委員会 昭和五十六年、山内神社宝物資料館発行）所載記事による。

2、拙稿「島原の乱の使者の戦い（その1）——毛利藩の場合——（覚書）」（『茨城女子短期大学紀要』37、平成21年3月）

3、『山内家史料 第一代 一豊公紀』（山内家史料刊行委員会 昭和五十五年、山内神社宝物資料館発行）収「真如寺記録」^{569p}ただし慶長六年に収められているが、翌七年の事であると『史料』に指摘がある。